一般社団法人ヤオ族文化研究所設立趣意書

　ヤオ族は、中国南部から焼畑耕作による移動を長期間重ね、広く東南アジア大陸部（ラオス・ベトナム・タイ・ミャンマー）へ、さらに難民としてアメリカにも移住しています。ヤオ族は、中国文化の圏域外へと跨境（こきょう）してなお漢文化から受容し自ら体系化した漢字文書を保持し続けています。

　この漢字文書は種々な儀礼で使用され、ヤオ族の重要な文化資源といえます。

　移住という行為は神話・儀礼文書・個人的経験のいずれのレベルにも共通する“先祖伝来の営為”であると認識されており、ヤオの個人的民族的アイデンティティーは移住を常態とみなし、移動し続けることを中核とすることで形成されています。このことがヤオ族の順応性・柔軟性に加え独自性を失わない価値観に表われているといえます。

　神奈川大学プロジェクト研究所ヤオ族文化研究所を2008年に発足し中国湖南省藍山県に居住するヤオ族（ユーミエン）が伝承する儀礼の調査を通じて、儀礼の実践及び儀礼で使用される文献の両面から、ヤオ族の儀礼知識の全容を把握し、全体像を明らかにしようと取り組んできました。

　本研究所の儀礼調査と文献の解読作業により、遠く離れる湖南のヤオ族とタイ北部やベトナム北部やラオスのヤオ族が継承する儀礼知識が相当程度相同であることがわかってきました。これはヤオ族の儀礼が文献の読誦により進行し、文献をお手本として文書が作成されるからですが、道教的な宗教儀礼の知識が広い地域にわたり、長年維持・伝承されてきたことは驚嘆すべきことです。本研究によって、文献・文書のみならず、それが如何なる目的でどの段階でどのように作成・使用されるかという儀礼の実践との対応を明確に記録化し保存することで、宗教儀礼知識の総体を立体的に継承することが可能となりました。これまで神奈川大学プロジェクト研究所ヤオ族文化研究所を拠点として儀礼調査で収集した資料（文献及び映像資料）と研究成果について順次ウェッブサイト（http://www.yaoken.org/）上、出版物（通訊1～5号）等で公開を進め、国際シンポジウムを2009年（中国長沙）2010年（神奈川）2012年（中国長沙）で開催し、日本民俗学会第64回大会でグループ発表を行ない、さらに国際学会「地方道教儀礼実地調査比較研究」（香港大学）にも招聘を受けるなど研究交流の成果をあげてきました。

　この儀礼文献・文書の公開を通じて、ヤオ族自身が自民族の文化を再発見し再評価することに繋がり、すでに本研究の活動に呼応して、新たに湖南省瑤族文化研究センターが設立されたほか、相同の儀礼知識を伝承してきたものの継承の危機を迎えつつあるタイやベトナムのヤオ族が藍山県の儀礼の資料の提供を望んでおり、ヤオ族の儀礼伝承にさらなる展開が予想されます。国境を越えて長年移住を重ねてきたミエン・ヤオ族において層の厚い祭司たちの存在そのものが儀礼知識と儀礼文献（漢字文書）の維持再生産を支えてきたといえますが、近年祭司になる者は減少し続け次世代に引き継がれない傾向が顕著です。それは儀礼知識の複雑さにも起因すると考えられますが、儀礼の実践及び儀礼で使用される文献そしてその読誦歌唱法からの多面的な解読の取り組みにより、膨大なヤオ族の儀礼知識の総体を立体的に解明することが急務とえいます。継承の危機にある儀礼と文献・文書を収集記録保存することは、ヤオ族の社会にとどまらず人類文化の保存継承活用の観点からもその意義は大きいといえます。

　今後さらにヤオ族の文献を収集している国内外の諸機関（バイエルン州立図書館・ボードリアン図書館・オランダ国立民族学博物館・米国議会図書館・麗水学院畬族文化研究所・南山大学人類学博物館）で資料の閲覧収集を進め、複数の異本と対校することで藍山県の文献の個性と普遍性を明確にできると考えます。諸機関との連携関係を確立し、ヤオ族文化研究所をヤオ族の儀礼と文献の保存・活用・継承に資する研究拠点とし、国際的な研究ネットワークの構築を図り、研究交流を促進したいと考えます。

　神奈川大学プロジェクト研究所ヤオ族文化研究所は2015年3月31日で終了となりますが、引き続きヤオ族研究の拠点として活動し続けることで、ヤオ族文化の保存継承活用に寄与できると考え、この度一般社団法人ヤオ族文化研究所を立ち上げることにした次第です。

平成２７年４月５日

一般社団法人ヤオ族文化研究所設立代表者

　　　（氏名）　　　廣田　律子